

4月2日

ヨブの祝福
(ヨブ記42:7-17)

○わが僕ヨブ汝らのために祈ろう。(ヨブ四二・八より)

○ヨブその友らのために祈った時、エホバ、ヨブの苦難を転じ、

そしてエホバ、ヨブの所有物を二倍に増し加え給うた。(ヨブ四二・一〇)

このようにエホバ、ヨブに対し始めよりも終りを祝福し給うた。

(ヨブ四二・一二上)

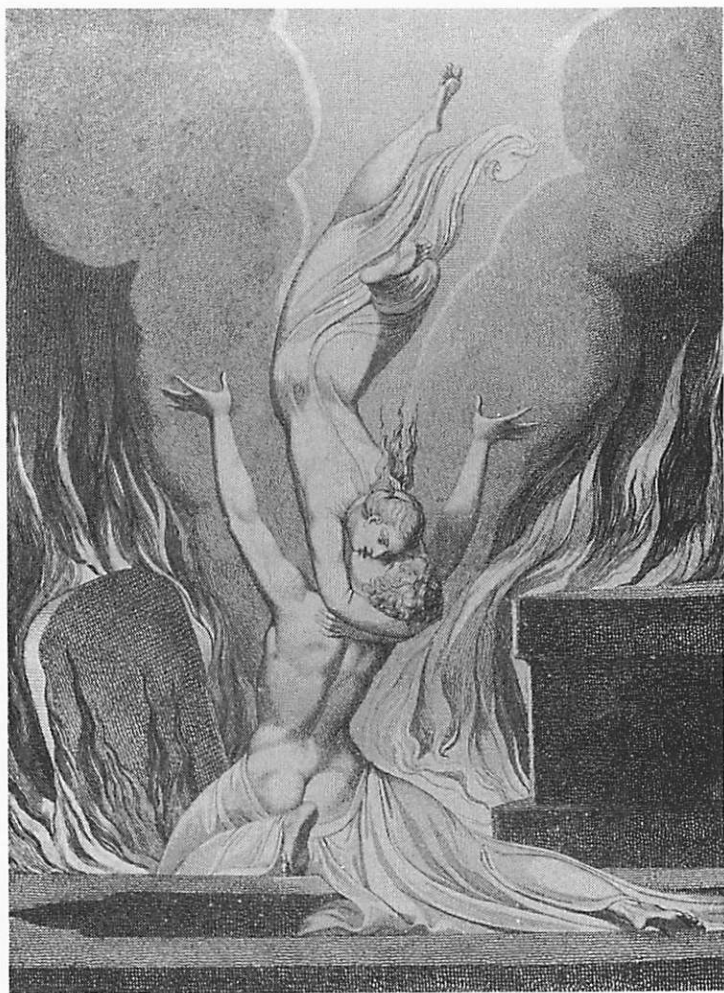
(ヨブ四二・一五)

○全国の中にヨブの娘たちほど美しい婦人は見当らなかった。

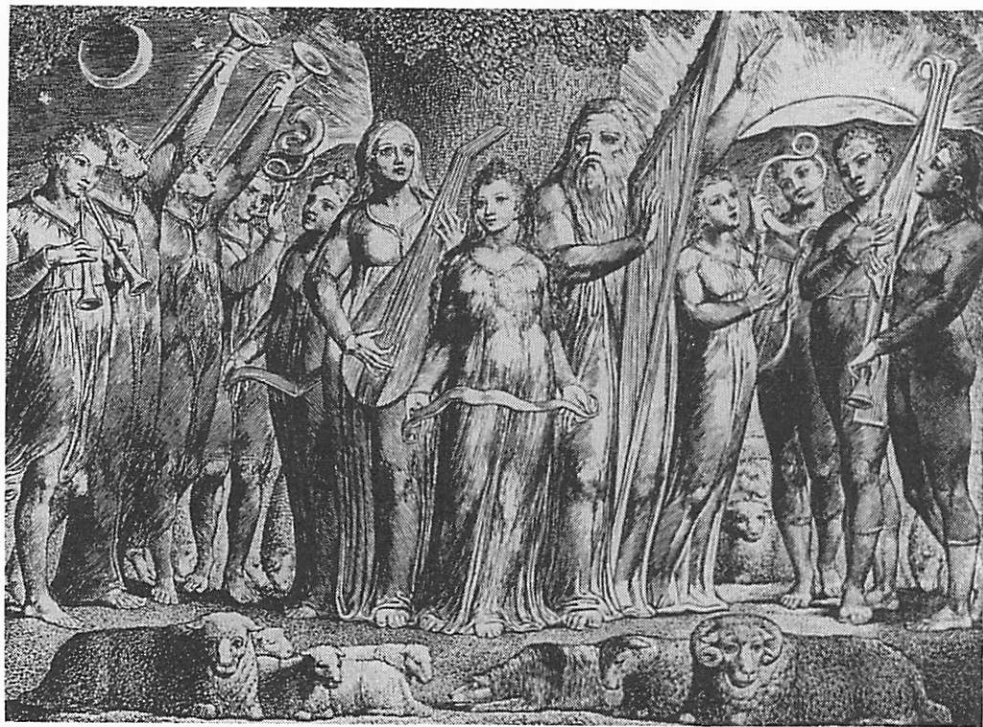
○この後ヨブは百四十年生き存らえて、その子らまたその子らとそ

の子と四代までを見た。(四二・一六)

生ける屍のような状態のヨブが、神の目前に平伏して懺悔し、神に回帰し、且つ彼は議論をした三人の友らのために祈った。神に夫々審かれた三人は神命によって燔祭を献げたのであったが、ヨブの祈りによって罰せられずにすんだ。神に捉えられた者の告白と祈りが人を動かす。またエホバは、友のため執り成しの祈りをしたヨブをその苦難から転じて旧状に倍した境遇に入れた。ヨブは別人の如く瑞々しく復活した。すべての所有物が倍增され、七人の息子も三人の娘も復活して立ち帰った。しかも娘たちは大変な美人となった。ヨブはなほ百四十年生きたという。かくてサタンは完全に負けたわけである。この第四十章は第一、第二章と大きなコントラスト(対照)をなして輝いている。しかし地上でかくも祝福されているヨブの相は、実は天上の相の投影ではないか。



(ヨブ42:10) ヨブの子らの復活の象徴：魂（女性の相）が肉体（男性の相）に帰る（ブレイク）



(ヨブ42：7-17) ヨブの全家が祝福される（ブレイク）

4月3日

言の愛の女のラミシュ
(雅歌 1:1-2:7)

彼れその口の接吻^{くちづけ}をもて我に接吻せんことを！ げに汝の愛は酒に優り、汝の香膏^{にほひあじ}はその芳香^{かおり}妙^たへに馨^{かか}はしく、汝の名は濺^あがれたる香膏の如し。(雅歌一・二、三上)

我れはシャロンの野花、谷の百合^{ゆり}なり。(三・二)

わが愛する者の男子^{おとこ}らの中にあるは森の樹の中に林檎のあるが如し、我はその蔭に坐るを欣ぶ、その実はわが顎^{あご}に甘ければなり。(三・三)
彼の左手はわが頭の下にあり、その右手をもて我を抱く。(三・六)

「雅歌」は原語では「歌の歌」で、諸々の歌の中の最も優れた歌の意。ゲエテが聖書を「書中の書」といったように。ゲエテはこの雅歌を愛読し試訳もした。この雅歌はしかし、その作者、構造、諸説紛々。ルターは王上四・三三のゆえにソロモンの作としている。王者ソロモンが多くの美女を宮殿に抱^{かか}えたわけでその一人にこの田園の乙女、シュラミ(タボル山の南西の村落、ナザレの南方)の女も抱えこまれた。しかし彼女の恋仲の牧人との愛は逆に深められる。牧人の言はむしろ少ないが、彼女の愛の告白は寄せては返す満潮の波のようにいよいよ迫ってくる。権勢も財富も饗宴も地位も、純なる愛を、シュラミの女と牧人の愛を破ることはできない。愛は最大の力である。恋愛、生命賭けの恋愛はどんな悲劇に終るとも、永遠性を有っている。聖書の中にこのような恋愛歌があることはむしろ当然で、人間性のゆたかな肯定である。詩篇やヨブ記同様、無名の作者！

4月4日

春が来た！
(雅歌2：8-14)

ハ 聴け！ わが恋人なり。視よ！ 彼来たる。山を跳び越え、岡を
躍り越えて。九 わが恋人は羚羊の如く、牡き小鹿の如し。視よ、彼
はわれらの壁の後ろに立ち、窓より覗き、格子より窺ふ。三 わが恋
人われに語りて言ふ「わが伴侶よ、わが美女よ、起ちて出で来たれ。
二 視よ、冬すでに過ぎ、雨もやみてはや去りぬ。三 諸々の花は地に
現はれ、鳥の囀ずる時すでに至れり。山鳩の声われらの地に聞こゆ。
三 無花果の樹はその青き果を赤らめ、葡萄の樹は花咲きてその馨は
しき香気を放つ。わが伴侶よ、わが美女よ起きて出で来たれ。四 磐
間に居り、断崖の匿場に居るわが鳩よ、われに汝の面を見させよ。
汝の声を聞かしめよ。汝の声は愛らしく、汝の面は美し。」

シュラムの女はソロモンの幕屋の中に閉じこめられているのだが、もう心は陽春の万物
復活のすがたに躍っている。愛人待つ心は一日たりとも眠ったことがない。

この右掲のいくたりは相思相愛の心の歌としてまことに美しい。恋人を鳩という表現は
古今おのづから同軌同調である。はやくそんなところからぬけて、大自然が春を謳歌し
ているところへ出て来なさいと牧人は窓越しに呼びかけている。

キリストは「ソロモンの栄華もこの花の一つにも及ばない」といって野の花を指して語
った。「われはシャロンの野花、谷の百合」といったこの田舎娘の純情の美よ！

4月5日

彼我一如

(雅歌 2:16, 17)

わが愛する者はわが有、我は彼の有なり。彼は百合の中にてその群を牧ふ。

日の涼しくなるまで。また日影のかたぶくまでに、わが愛人よ、
 帰り来たれよ。隔ての山々を越えて羚羊の如く、また壮き牝鹿の如く。
 (二・一六、一七)

神は愛なり、という。愛そのもので在り給う。愛は愛せられる対象を要する。神の創造のわざは愛のわざである。それ以前に神の分身たる霊界のキリストが即ち独子として神の愛の無比の相手であった。それが地上に降誕したのがイエスであった。神からすべての愛が生ずる。それが恋愛であろうが、親子、兄弟、姉妹、師弟、朋友その他あらゆる人間関係における愛は本来神からのものである。この本源意識を失って、神なきが如くしているところに、愛から生ずるさまざまな問題が発生して、世の末までも混沌として渦巻く。「わが愛人はわが有、我は彼の有」。本当の愛人関係はこのような一如的なもので、我と汝との関係が二にして一なるもの。愛で結ばれた夫婦関係が本来そういうものである。本当の愛は相手のためなら生命を棄てるという棄身の愛である。この田舎娘と牧人の相愛関係はそういう美しい心情、生命賭けの心情から発している。

ベートヴェンは「不滅の恋人」を心の中に有っていた。しかしその恋愛は地上では結ばれずに終わった。その手紙の終りに「わが生命、わが一切、お元気で、愛しつづけて！ あなたの愛人の極めて信実な心を見損わぬように。永遠に貴女の、永遠にお互の」と書いた。

4月6日

女性美

(雅歌 4:1-5)

一 ああ汝美しきかな、わが佳伴よ。ああ汝美しきかな、汝の瞳は面
 帕の奥より覗きて鴿の如し。汝の髪はギレアデの山より馳せ降る山
 羊の群にさも似たり。二 汝の歯は羊の群の如し、三 汝の唇は紅の組
 糸の如く、その口は美し。汝の頬は柘榴の半片に似たり。四 汝の頸
 項はダビデの楼の如し。五 汝の両乳房は百合の中に草喰む牝鹿の雙
 子なる児鹿にさも似たり。(四・一一五より)

恋人の美を牧人は右のように讃嘆している。鴿の眼のような丸い明朗な瞳。ヨルダン川
 の東方ギレアデ高原の山羊の毛は光沢のある黒色で、この女の長い黒髪を語っている。齒
 は純白の羊毛のように白く光沢がある、というのである。唇は健康な紅色で、所謂口紅に
 よるものではない。頬は陽光を浴びた美しいざくろの半分のようなという。頸項即ち女の
 頸が弱々しくなく、健康美をもったものであるのをダビデの楼のようだという。第七番目
 に乳房をあげているのは、第一番目の瞳と相照応する女性美の象徴としてであらう。

ここで感ずることは天然自然の中で育った女の美を語るのに自然界の美しい動植物を比
 喩に用いることで、人間の健康美はどこまでも自然と一如の生活にありということである。
 この両乳房のくだりを援用して、ゲートは「ファウスト」の三三三三行から三三四二行で、
 男女の愛と、これを取り持って結婚させる崇高な役割を神様がなさるといったことを謳っ
 ている。

4月7日

愛は最大の力
(雅歌7:11-8:14)

六 われを汝の心におきて印おしでの如くし、汝の腕におきて印の如くせよ。
愛は強くして死の如く、熱情は烈よしくして陰府よみにひとし。

その焰は火の焰の如く、エホバの焰なり。

七 愛は大水も消すこと能はず、洪水も溺らすこと能はざるべし。

人その家の一切の物を悉く与へて愛に換へんとするともいやしめらるべし。(雅歌八・六、七)

これはシュラムの女の詩的な言だ。印おしで、原語ホータームはギリシヤ語のキャラクターに当る語で、刻み込まれたものの意で、生れながらの性格をキャラクターというのはそこから由来している。恋人であり新郎を約束されているあなたの心に不滅の印として下さい、と新婦を約束されている乙女が切に願っている。腕に印するとは日本なら文身いれずみだろうが、これは腕輪か指輪のことである(エレミヤ二二・二四)。

ただあなたに一身を献アハバげている愛は死を覚悟したものの、熱情キマアは本来嫉妬という語で、旧約では神の愛を「妬みの愛」とも謂う。サタンに奪われては大変という神の熱愛だからである。ここでも「エホバの焰」といっているところに決定的な強さがある。旧約では死ぬと陰府にゆくというのが常識で、死も陰府も同じ表現。右掲、乙女の一連の告白は愛の極限的表現。ソロモンの権勢も誘惑も、この牧人びとと田舎娘の純愛を動かすことができなかつた。雅歌は驚くべく美しい劇的構造の愛の歌である。

4月7日

われはシャロンの野バラ (雅歌のころ)

作詞1979・12・20

(歌調:「カチューシャ可愛や」中山晋平作曲)

Tatsuo Koike, 1979. 12. 20

Shinpei Nakayama, 1917

わ れ は シ ャ ロ ン に は な さ く の ば ら わ

が - ま き び - と は セ - き - た - れ わ

れ を い だ - き て く ち づ け - た も れ

- 4 「われをみ胸に 印となせよ
愛の契りは とこしへに
死をも突きぬけ 焰と燃ゆる!」(f.)
- 3 「神にわが魂 一如となれり
われらもまこと 一つなり
いざや野山の牧場に往かん。」(m.)
- 2 「汝れの鳩胸 み霊にみちて
汝れの息吹きは 天つ風
汝れが唇 滴る蜜よ。」(m.)
- 1 「われはシャロンに 花咲く野バラ
わが牧人 馳せ来たれ!
我を抱きて 接吻たもれ。」(f.)

4月8日

萬象流転

(伝道之書 1: 2-7)

ニコーヘレス 招集者曰く、空の空、空の空なる哉、都て空なり。(伝一・二一七)

三 日の下に人の勞して作す諸々の勞作はその身に何の益かあらん。

四 世は去り世は来たる、地は永久に存つなり。日は出で日は入り、またその出でし処に喘ぎゆくなり。風は南に行き北に旋り、旋りに旋りゆきて、風その旋る処に帰りゆくなり。河はみな海に流れ入る、海は盈つることなし。河はその流れゆく処を指して復流れゆくなり。

これは「伝道之書」の冒頭の句。本書は原典では「コーヘレスの諸言」と謂う。コーヘレスとは「カーハール」集会を司る者、即ち招集者で、司会者、説教者である。ギリシャ語のエクレスィアステース、ラテン語のコンキオナトール。この書の場合コーヘレスは特定の人で固有名詞的。

この冒頭言を読んで、連想するのは、あの方丈記の一節「ゆく河の流れは絶えずして、しかもとの水に非ず、淀みに浮ぶ泡沫はかつ消えかつ結びて、久しく止まることなし……」の有名なひとくんだり、及び平家物語の開巻第一節「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。驕れる人も久しからず、唯春の夜の夢の如し。猛き者も遂には滅びぬ。偏に風前の塵に同じ。……」である。

自然界も人間界も巡り旋って、諸行無常、盛者必滅、会者常離。萬象萬事流転する。ギリシャの哲人ヘラクレイトスも「パンタ・レイ」萬象は流転する、と言った。儂いという文字が表わしているように、夢の如く消え去る諸行無常を「空の空」といったのは至言。

4月9日

「日の下に新しきもの無し」

(伝道之書 1: 8-18)

一・八よろず

萬の言用い尽されて、人なほ言い尽す能はず。目は見るに飽くことなく、耳は聞くに充つることなし。先に有りしものはまた後にあるべし、先に成りし事はまた後に成るべし。日の下に新しきものなし。見よ、是は新しきものなりと指して言うべきものあるや。我れ日の下の諸行を見たり。嗚呼皆空にして風を捕うるが如し。我れ心を尽して智慧と知識、迷妄と無知を知らんとしたりしが、是も亦風を捕うるが如くなるを曉れり。夫れ智慧多ければ忿懣多し、知識を増すときは憂患を増す。(伝一・八、九、一〇、一四、一七、一八)

歴史的事象は一回的なもので全く同じことが繰り返されることはない。これが人間の自由意思の存在する所以である。それでも類型的なこと、類似な現象はいくらでもある。コ一へレスが感じているのはこの観点から歴史の世界と人生を見ているから、萬事は流転して、日の下に新しいものはないと言っている。生起しては消滅してゆく。生れては死んでゆく。問題の鍵は死にある。生活の上の智的判断が増せば社会的不公平に対する憤激が起きるし、知識が増大すれば心配ごとが増えてくる。また疑問だらけ、不可解だらけ。迷妄と無知を悟ろうとしても空莫として風をつかむように空しい。要するに、死の限界をもつ有限界と人間相互の相対界では人生は夢のような空しいものだ。しかし「紀元」を創する「日の下に新しきこと」が竟に起きた、キリスト・イエスの出現である！

4月10日

萬事に時期あり
(伝道之書 3 : 1-15)

◎天^{あめ}が下の萬^{よろず}の事に時期^{とき}あり。萬^{よろず}の業^{わざ}に時期^{とき}あり。(伝三・一一八)

◎生^{うま}るるに時あり、死^しぬるに時あり。

◎殺^{ころ}すに時あり、医^いすに時あり。毀^こつに時あり、建^たつるに時あり。

◎泣^なくに時あり、笑^{わら}ふに時あり。悲^{かな}しみの時あり、舞^ま踊^{どり}の時あり。

◎石^{いし}を擲^なつに時あり、石^{いし}を集^あむるに時あり。

◎求^{もと}むるに時あり、失^{うしな}ふに時あり。保^{たも}つに時あり棄^すつるに時あり。

◎裂^ひくに時あり、縫^ぬふに時あり、黙^{もく}すに時あり、語^{かた}るに時あり。

◎愛^{あい}するに時あり、憎^{にく}むに時あり。戦^{たたか}争^いの時あり、平^{やす}和^{しづ}の時あり。

人生万事、夫々の然るべき時期があるとはまことに至言である。それはある時点の意味したり、ある期間を意味したりする。それも個人の性格、資質や、運命、環境によって、その人らしき時点や時期というものがある。それを知る道は、神に祈り求めること、神の啓示にあずかることである。要するに神本位、神主体の生活態度であることが基調となる。おのずから、然るべき時点、時期を直覚するようになってくる。第十一節に「神の爲し給うところは皆その時期に適して美しかり」とある通りで、神の声、神の業に即し、従ってゆくときに、大切な瞬間をつかみ、それに処してゆくようになる。具体的相手はキリストであり、聖書を身読していると、ひらめきが来て、時点、時期を知るようになる。

4月11日

畏神遵法
(伝道之書11:12)

○汝の糧食たべものを水の上に投げよ。多くの日の後に汝ふたたびこれを得ん。(伝一一・一)

◎汝の若き日に汝の創造主つくりぬしを記えよ。(二一・一上)

○塵はもとの如く土に還り、靈はこれを賦さすけし神に還るべし(二二・七)

○事のすべての帰する究極を我ら聴かん、神を畏れ、その誠命まことを遵まもれ。これは萬人の本分なり。(二二・一三)

○糧食は人間生活の具体的な必要欠くべからざるものである。そのパンを水の上に投げよ、とは何を意味するのか。それを飲んで食べるのは鳥か魚か。とにかくおのれの生命の糧かてを恵んでやれ、と端的に解する。神の言は靈の糧である。この靈の糧なる神の言、聖書の生きた聖言を大いに人々に伝えよと伝道をここでコーヘレスが唱道していると見る。なかなか人々はこれを受けとらない。無駄が多いのだが、倦まず、撓うなまずやれ、という。その靈の糧の果たる天国的集団が生じよう。それが報いである。

○天地万物の創造主を魂の源泉として憶えて、創造主の力で創造的な人となれ。

○肉体は塵の如く土に還っても、靈魂たましいは神に還る、しかも靈体を衣きせられる。

○コーヘレスは、人間の相對界は要するにそれ自体としては空の空だといっている。これが伝道の書の基調だが、この基調に次元のちがった変調がひびく。それは神を畏れ、神に平伏し、聖言、靈法しんぽうに遵したがうという天来の変調で、これですべてが空でなくなる。ハレルヤとなる！

4月12日

宗教・道徳・学問

(箴言 1-7)

◎実存主^{エホバ}を畏るるは知識の本源なり。(箴一・七上)

○わが警告^{あわれみ}に従ひて回帰せよ！視よわが霊を汝らに潑ぐ。(二・二三)

○慈愛^{あわれみ}と信実^{まこと}とを汝より離さざれ。これを汝の心碑^{こゝろいし}に記せ。(三・三)

○汝心を尽して実存主^{エホバ}に信頼^{しんらい}せよ、おのが明智^{めいし}に倚る^よ勿れ。(三・五)

○神は嘲笑者^{あざわらひ}をあざけり、謙る者^{へうだ}に恩恵^{めぐみ}を与え給う。(三・三四)

○右にも左にも偏る^{かたよ}勿れ、汝の足を惡より逸れしめよ。(四・二七)

○それ誠命^{いまじめ}は燈火、律法^{おきて}は光、教訓^{おしな}の懲治^{こらしめ}は生命の道なり。(六・二三)

日本の教育では、よく徳育、智育、体育といったことを言う。しかしイスラエル民族の教育の根本は宗教である。キリスト教国もそうである。日本の教育一般の弱点は宗教心を養うことを欠いている所にある。私は東大教養学部^{きやうがくぶ}に於て聖書を読まなければ西欧の文化の根本精神はつかめないことを力説した。独協学園^{とくけいがくえん}に於ては「敬天愛人」を教育の第一項に掲げて貰いた。道徳と学問の根柢は畏神愛神の宗教にあることを銘記せよ、である。

この「箴言」という智慧文学に於て、畏神が知識、学問の本源であることを明言している。ユダヤ系の人に秀れた学者が輩出しているのも、こういう魂の構造から来ている。右掲の諸句を見てもその自明の理がうなずける。「慈愛^{あわれみ}」(愛)と「信実^{まこと}」(義)は神の本質として捉えられている。これは新約聖書まで貫いている。

4月13日

畏神に天道あり
(箴言 8-15)

○実存主を畏るるは悪を憎むことなり。我は傲慢と驕奢、悪道と虚

偽の口を憎む。(八・一三)

○実存主を畏るるは智慧の根源、聖者(神)を知るは聡明なり。(九・二〇)

○怨恨は争闘を起し、愛はすべての罪過を掩ふ。(二〇・二二)

○実存主の道は直き者の城にして、悪を行ふ者の滅亡なり。(二〇・二九)

○真実の唇は永遠に保つ、されど虚偽の舌は瞬間たるのみ。(二二・一九)

○智慧者の教法は生命の泉なり、死の畏を脱れしむ。(二三・一四)

○実存主を畏るるは生命の泉なり、死の畏を脱れしむ。(二四・二七)

箴言集は一般に処世の道を説く智慧文学とされているが、その処世の道が天道に即するところにねらいがある。いかなる民族も個人も、この天道に反しては滅びる。その天道は畏神の道である。傍若無神のな歩き方生き方をしてゐる現代文明文化人は心を虚しくして、時に魂の在り方を自らに問うべきである。自主の、自由の、というところに傲慢、身勝手、のさばる。民主主義は社会の理念としては結構だが、個人の魂の在り方が畏神を根拠としていないと、自由が我欲我執の温床となる。愛も義も自由もすべて神からくる、神の愛、神の義、神の自由を託身するところに、人を愛し義を生き、自由の法を行ずる源泉がある。然り神の「愛はすべての罪過を掩ふ」。

4月14日

七転八起

(箴16-25)

- 驕傲は滅亡に先だち、霊の誇りは蹉跌に先だつ。(二六・一八)
 ○己が霊を治むる者は城を攻め取るに優る。(二六・三三)
 ○愛の追求者は人の過誤を蔽ふ、(二七・九)
 ○貧者を憐む者は神に貸すなり。その旋しは神償ひ給ふ。(二九・一七)
 ○父母を罵る者は、その燈火暗闇の中に消ゆべし。(三〇・二〇)
 ○人の魂は神の燈火なり。五臓六腑を洞察する。(三〇・二七)
 ○義人は七度び倒るるも起き上がる。(三四・一六)
 ○おのが霊に抑制無き人は城壁なき破れたる城なり。(三五・二八)
 ○驕慢が滅亡の前ぶれであることは歴史が証明している、個人でも国家でも。
 ○自己との戦いは最難の戦、自己に勝つ事は最大の勝利、とは哲人カントの言であった。
 ○愛を愛する人は深いゆるしの心をもっている。
 ○困窮の人を具体的に助ける愛は神に祝福されるのである。
 ○モーゼの十誡(言)にある如く、父母を敬愛しないと、自分が地獄の人になる。
 ○魂は神の燈火！ キリストが「汝は世の光なり」と。キリストを体受して神の光たらん！
 ○七転八起！ 躓いても転んでも滑っても、神の力で必ず起き上って前進あるのみ。
 ○人格の中心たる霊よ神のみ前に平伏せ、然らばみ力によって靈法を歩み得む。

4月15日

神秘と栄光

(箴言26—30)

○わが奇すしとすもの三あり、否四あり、わが識らざるものなり。

即ち、空を飛ぶ鷲の路、磐の上を這ふ蛇の路、海の真中を往く舟の路、男の女に逢ふの路是れなり。(三〇・一八・一九)

○艷麗はいつわりなり、美色は氣息の如し、唯だ神を畏るる女は讚むべき哉。(三〇・三〇)

○不思議と思われるものは、無数にある。大宇宙から小宇宙に至るまで、むしろ不思議でないものはない。神は絶大な芸術家であり給う。その創造のみ業はたびたび驚嘆のほかはない。箴言の作者はここに面白い現象を挙げたものである。たしかにソロモンの原作も多々あるう。特に男が女と逢い引きする路は神秘的だという。それは祝福されて結婚にゴール・インするであらう。恋路は神秘である。運命から、環境から、それが悲劇になることがむしろ多い。偉大な芸術の花が咲く。ダンテ然り、ゲーテ然り、ベートベヴェン然り、ロダン然りである。しかし恋路を踏み越えた神秘の路が一つ残されてある！

○生まれながらの自然のすがたに女性美はある。神を畏れ、キリストに愛されて、神的な愛にあふれている女性美しい。美しき魂を映し出している眼眸が美しい。靈肉渾然たる美である。神の栄光である。神の栄光はキリストに、キリストの栄光は男に、男の栄光は女に現われるとパウロがいみじくも道破した。(コリ前一一・三・七)

4月16日

自己不定の道

(詩篇第1篇)

一 恵まれたる哉、この人！この人は悪の徒の謀略に歩まず、
 二 罪びとの途にも立たず、嘲者の座にも坐らず、
 三 反って、神の法にこそ、その歡喜があり、
 四 聖法をば憶う昼も夜も。
 五 その存在は木にぞ似る、
 六 水の流く辺に植えられて、
 七 その期到らばその実を結び、
 八 その葉もまた凋落むなき。
 九 かるが故そのなすところ皆栄えゆく。
 一〇 然かはあらず、かの悪の徒は。
 一一 むしろ似る、風の吹き出る糠殻に。
 一二 されば悪の徒は審判に立ち得ず、
 一三 また罪びとは義人の集いに。
 一四 宜べ、神は義人の道を知り給う。
 一五 されど、悪の徒の途は亡びる。

自然界には物理的法則がはたらいている。人間界には道徳的法則がある。これを実践するのが善であり、これに反くのが悪である。人間の実際生活には善悪が錯綜している。この悩みの次元を突破させるのが宗教の力である。神の法とその力によって生きる道である。神の法は具体的には神の意志である。神の意志を祈りで聴き自己の意志を否定する。信仰とは神に然りと告白し、自己を否とすることである。この詩篇の奥義は、かくて神の意志なる靈法を飲んで神の力に在って生きる道である。

4月17日

求神の道
(詩篇第14篇)

愚者が心の中で言った「神は無い」と。

彼らは腐れ果てて、悪行をなす。善を行う者は絶えて無い。

神は天から人の子らを蹴下して、

若しや求神の賢者ありやと見給うに、

どれもこれも背いて、悉く墮落している。

善を行う者は絶えて無い、一人だに無い。

(詩篇一四・一二、三)

茲に言う「神は無い」とは、所謂無神論の如き智的な判断ではなく、実践的に神の存在を無視すること、それが愚者なのである。権力者から庶民に至るまで、世は不信不義の国家社会で、預言者らが神に立ち帰ることを叫んでも空しい国家滅亡に近き頃の状況。

求神の者が愚者に対する賢者であるが、神が天から蹴下し給うにそういう求神の者が一人もいない。形式的な或は観念的な信者はいるであろう。併し真の求神者、真の善行者が一人だに見当らないという。相対的な意味では賢者も義人も善人もいるだろう。併し真の神意体現者たる義人は一人もいない。使徒パウロが新約の世界で、キリストの他に義人は一人もいない、と告白したとき、この詩篇を引用した。我々はいづこに求神をするか。神意を完全に体現したイエス・キリストに於てこそ求神ができるので、福音書のイエスに於て神を見るのでなければいづこにも神は見えない。「我を見し者は父(神)を見しなり」とはイエス自身の言である。彼だけが絶対次元の義人である。

4月18日

至福
(詩篇第16篇)

五

神エホバこそはわが嗣業ゆずり、わが酒杯さかずきの分前わけまえである。

あなたはかりなわはわが運命さだめを支えて在り給う。

準繩はかりなわはわがために樂しき地におちた。

げに嗣業ゆずりはわが上に善福さちとなった。

わがため謀はかり給う神エホバを讃めまつる。

夜な夜なわが腎はしはそのことを諭さとす。

絶えず私はエホバをわが前に在あらしめる。

彼わが右に在ます故私は断じて動かされない。(詩・一六・五―八)

八

七

六

契約の櫃ばこを中心としての神事、祭事が祭司アロンの一門及びレビの支派の天職であった。イスラエル十二支派(族)の他の支派の如く彼らには所領がなかった。祭司は什一の献物にあづかる特殊恩恵に生きていた。しかし真の祭司精神は、執成の祈りを以て人々を神の恵みにあづからさせることにある。そのためには、彼自身が神と一如の祈りの人でなければならぬ。そのとき彼は「神こそはわが嗣業、わが酒杯の分前である」、と告白する境地、即ち神はわが有あわが酒杯に溢る葡萄酒である、といって、神の生命に全的にあずかることになる。新約的にはキリストが酒杯であり、酒は聖霊である。

この詩の作者は祭司の本質を謳いつつ、自分が祭司の境地に入っている。ルターが唱えた、すべての基督者は祭司であって、職業的祭司は不要だという消息を謳っている。

4月19日

天然の神秘
(詩篇第19篇前半)

一 諸々の天は神の壮嚴をあらわし、
蒼穹は聖手の業を示している。

二 昼は昼に秘語を注ぎ、

夜は夜に秘智を告げる。

三 弁なく、言なく、

四 声こそ聞こえね、

その絃音は全地にゆきわたたり、

そのことばは地の極にまで。

陽のために彼は幕屋を設け給うた。

五 陽は新郎の如くその天幕を立ち出で、

勇士の如く欣然と馳場を駆けてゆく。

六 諸天の極みから彼は現われ、

その極にまで巡りゆく。

その暖熱から隠れあるものとはない。

(詩一九・一六)

[原文は一九・二一七]

詩篇第十九篇は前半に於て神の天然を謳い、後半に於て神の靈法を告白している

自然界も人間界も神中心であつて、神の創造の業と、

神の靈道を讃えてやまない。

諸々の天が神の壮嚴なる

創造の業とその栄光を現わ

している、この神秘極なり

ない大宇宙を、神に圧倒さ

れて讃嘆している。

しかもこの大自然を通し

て神語が注がれ、神知が告

げられている。言なき言、

声なき声を詩人は聴く。

そして太陽に於て新郎の

英姿を連想し、太陽の光熱

に於て神の愛と生命的な恵

みを体感して讃美している。

4月19日

(詩) 最大の芸術家

(詩19: 1-6)

作詩: 1983.9.6

歌調: 一高寮歌(大平洋の波の穂に)

(沢村寅二郎原曲)

最大の芸術家

1 涯しも知れぬ大宇宙

銀河の数は何億か

何億光年走るとも

極まりなければその時空

夜空を仰ぎ言なし

神のみわざの神秘さよ

2 太陽系のこの地球

その天然のゆたかさよ

春夏秋冬めぐりゆき

花咲き匂う野山あり

小鳥は舞いて昆虫すたく

神のみ園の美しさ

3 椿に梅と桃の花 海棠、連翹、山桜

朝顔、萵、百合、桔梗、尾花よ、萩よ、藤袴

撫子、葛よ、花郎花、宇宙の影かコスモスよ

創造のわざ萬象の いやはての傑作そは何ぞ

神の映像人の影 文明文化極まりて

芸文の華咲き香る 芸術の源は神と知れ

大自然には国境なし 幼児らにも国境なし

いづれの国も神の属 自国の使命自覚して

大指揮者たる神に拠り 交響楽を奏せずや

読者は本巻の「詩篇」の諸篇
を読まれるときに、「小池辰
雄著作集」第四巻「詩篇珠玉
集」を御参照されますように。
ここに御助言しておきます。

4月20日

人生の歌
(詩篇第23篇)

一 エホバ 神こそはわが牧人、私は何も困らない。
二 若草の野に彼は私を臥させ、
三 憩いの水汀に伴れゆき給う。
四 わが魂を彼は甦らせ、
五 義しき道に導き給う、聖名のゆえに。
六 縦い死の蔭の谷を渡るとも
私は禍害を恐れない、汝が共に在ますから。
七 汝が杖、汝が杖、それが私を慰める。
八 汝はわが眼のあたりに筵を備え給う。
九 わが諸々の敵前で。
十 汝はわが首に油をゆたかに注ぎ給う。
十一 ああわが酒杯は溢れた。
十二 誠に善福と恩恵とが私に追い迫る、
十三 わが生命の日の限り。
十四 かくて私は神の家に住む、
十五 日に日が続き果てるまで。

詩篇全百五十篇の代表的な詩篇で「ダビデの絃歌」と題してある。原作はダビデであろう。
イスラエル人の生活は牧人に導かれてゐる羊群の如くであつたから、この起句は正に民族の歴史及び個人の生涯をズバリ告白してゐる。第二、第三節は天国的現実。第四節は地獄的現実も神の親しい力強い護りで突破できる消息である。第五節、第六節は煉獄的現実に於て、神が諸々の敵前で聖霊の油を注ぎ、我という全身的酒杯が神の生命力で溢れる。だから地上にあつて天的な恵福に追跡されつつ前進し、神の幕屋たる家に生涯住んで神の国に凱旋する。ハレルヤ！

4月20日

(詩) 人生の歌
(詩23に因みて)

主はわが教人
主はわが道伴れ

作詞：1979. 12. 27
歌調：S. 239「さまよう人々」
作詞：1976. 2. 21
歌調：S. 527「わが歎び」

1 わが主キリストは わが牧人
若草の野辺に われを臥させ
憩いの水汀に 伴れゆき給う
これこそ聖国の すがたなれや

2 たとい死の陰の 谷を往くも
我れに恐れなし 汝れは我れと
共に在まし給う 汝れの情け
汝がみ霊こそは わが生命ぞ

3 わが主はわがため 仇敵の前に
み霊の油を そそぎ給う
敵をも愛する 心こそは
聖霊より出づる 力なれや

4 恩恵と真理は 聖霊なれば
我らの中にぞ 入り来たれる
これぞ永遠の 生命なれば
われらは聖霊の 幕屋たれや

1 わが道伴れ わが情け
わが旅路の主よ
なやみにも 苦しみにも
わが力の主よ！

2 わが道伴れ わが情け
わが天路の主よ
山を越え 谷を渡り
偕に進み給う！

3 わが道伴れ わが情け
世の救いの主よ
わが身をも わが魂をも
捧げつつ進まん！

4 わが道伴れ わが情け
旅路の峠を
いくたびも 越えに越えん
天翔ける日まで

4月21日

神はわが光
(詩篇第27篇)

一 エホバ
神はわが光、わが救！ 私は誰をか怖れよう。(詩二七・一・五・一四)

五 神はわが生命の力、私は誰をか恐がろう。

げに彼は災禍の日に、その幕屋の中に私を潜ませ

一四 エホバ
その幕屋の奥に私を匿し、私を岩上に登らせ給う。

神を待望め、雄々しかれ、汝が心を堅うせよ、神を待望め！

詩篇第二七篇から三節を掲げた。波瀾萬丈の生涯をおくったダビデの絃歌と見るにふさわしい内容の詩である。読者は是非この詩全体を読んでいただきたい。神はわが光、わが救！」どんな暗雲が鎖そうとも、それを照破して臨むのが神の光である。「わが敵人よ、我につききて喜ぶなかれ。我れ仆るれば起きあがる。暗に居れば、エホバわが光となり給ふ」とは預言者ミカの証言(ミカ七・八)。神の光を光とした驚くべき人がいた。キリストである。「諸々の人を照らす真の光ありて世に來たれり」(ヨハネ一・九)と。その光なるキリストが、「汝らは世の光なり」(マタイ五・一四)と宣言している。その現実はいか、キリストという光体をわが衷に宿すときの現実である。それがまた救の現実である。そこには怖れがない。怖れどころか、ひとに光を頒つことが可能となる。敵をも救う生命の力が溢れるのである。旧約の言は新約のキリストの光を投じて読み入るとき、真に聖句が現実となってくる。幕屋も岩上もみなキリストである。「言は肉となつて我らの中に幕屋を張った」(ヨハネ一・一四)とある通りだ。「神を待ち望む」とは、未来を現在化して信頼することである。現前のキリストに在って雄々しからざるを得ない。



(詩27その他) ダビデ王：絃歌の詩人

4月22日

罪のゆるし
(詩篇第32篇)

一 二 五

恵^{めぐ}福^{ふく}れたる哉、過^{とが}をゆるされ、罪を蔽^{おほ}われた者！

恵^{めぐ}福^{ふく}れたる哉、神^{エホバ}これに不義を負^おわせず、その魂^{たま}にいつわり無き人！

わが罪を汝^{あなた}に告^つげ、わが過^{とが}を匿^{かく}さなかつた。

私は言^いつた「わが過^{とが}を神^{エホバ}に告^つげよう」と。

それで汝^{あなた}は赦^{ゆる}して下さつた、わが罪なる不義を。

この詩篇第三二は、ルターの謂^いう「悔改の七つの詩篇」即ち六、三二、三八、五一、一〇六、一三〇、一四三の中の一つである。

恵福なのは、神がわが罪過を無条件にゆるして下さる一事である。万人は罪びとである。万人は我執者^{エゴイスト}だからである。神がわが不義即ち神に対する信愛関係を破る罪を私に負わせず、自らこれを負ってゆるして下さる。何たるゆるしの恵みであるか。人間は自己を弁護し、弁解しようとする。そこに「いつわり」がある。「いつわり」とはそれゆえ、自分が我執者であること罪びとであることを全的に自認し告白しないことなのである。単なる虚言のことではない。あるがままのおのれを神のみ前に告白する人が「いつわり無き人」なのである。そのような碎けたる魂を神は無条件にゆるし給う。それは具体的にはキリストの十字架の贖罪によってである。アウグスティヌスは死の床の壁にこの詩の第一、第二節を掲げて感謝の熱涙を流した由である。ダンテは「淨罪篇」第二九歌の劈頭、レーテの岸辺でこの詩の第一句「恵まれたる哉、罪の蔽^{おほ}われたる者！」と歌う美女の声を聞いた。

4月23日

信仰の凱歌
(詩篇第46篇)

一 二 三 四 五 六 七 八 九

神は我らの避所^{さけところ}また力、

なやみの時の強き助けぞ。

されば我らは怖れない、地は変り

山々は海の最中^{もなか}に揺ぎ落つとも。

その大水轟きて激らば^{たぎ}激れ。

その漲^{みなぎ}りにより山々は震はば震へ。

河ありてその諸流^{ながれ}神の都を、

主高者の聖き住居^{すまい}を喜ばす。

民らは騒ぎ、国々は動いた。

神その声を出だすや、地は崩れた。

万軍の神は我らと共に在る。

ヤコブの神は我らの高き巖^{いわ}である。

来りて見よ！ 神の聖業を。

彼は地に驚くべきみ業をなした。

「汝鎮まれ！ 我れの神たるを知れ。

我は国々にまた全地に崇められん。

東方の猛鷲アッシリヤが西方の巨鰐エジプトと雌雄を争わんとした時、ア王セムナケリブの大軍がエルサレムを攻囲したが、預言者イザヤの神信頼とヒゼキヤ王の熱禱を嘉し給うたエホバはア王の陣営に一夜にして殲滅的打撃を与えて敗退せしめた(列王下一八、一九。イザヤ三六、三七参照)。このような史的背景はこの詩に最も相応しい。しかもこの詩句はイザヤ書の詩句と相照応するので、作者はイザヤかと思われる。

またこの詩篇に基づいたルターの「Ein feste Burg ist unser Gott」「われらの神は堅き城なり」。讚美歌二六七「神はわが櫓」参照。またアイザック・ワッツの「God is the Refuge」讚美歌二八六参照。

4月24日

砕かれた^{たましい}靈魂
(詩篇第51篇)

- 九 神よ、^な汝が愛によって私を憐み
汝が^な豊なる^{ゆたか}憐みにてわが罪を消し給へ。
み顔をわが罪から隠し
- 一〇 わが不義のすべてを消し給へ。
ああ神よ、清浄心をわが為に創造り
不動靈わが衷に新たに起し給へ。
- 一一 私をみ前から棄て給うな、
汝が^な聖き靈を私から取り去り給うな。
- 一二 汝が救いの喜びを私に回復し給へ
さらば自由の靈は私を支え給う。
- 一三 過誤を犯した者に汝が道を私は教えたい。
さらば罪人は汝に立ち帰る。
- 一七 神への犠牲は砕かれた^{たましい}靈魂！
砕かれた、破れた心を
神よ、汝は軽しめないで下さい！

本篇の詞書には「樂長に托したダビデの絃歌。ダビデがバテシバと通じた頃、預言者ナタンが彼の許に来た時に」とある。サムエル後書第十一、第十二章参照。正にこのような不倫の事件を背景にしたダビデの神の前に砕けた心から神に祈り求めた証しの詩としてふさわしいものである。

イエスは女を見て色情を起こしたら、姦淫したも同然だと言った。どの男がこの言に堪え得るか。姦淫の女にイエスは、「私も汝を罪しない」といつてゆるしてやった。「放蕩息子」のはなしで、さんざん悪いことをした揚句心碎けて父のもとに回歸して来たばろぼろの弟息子を無条件にゆるした父の心はイエスの心であった。

4月25日

神に飢え渴く

(詩篇63篇)

一 ああ神よ、あなたはわが神！
(エロヒム エール)

私は切にあなたを求める。

わが魂はあなたに渴く。

わが身もあなたを恋慕う。

水なき乾れた痩せ地のように。

三 汝が愛は生命にもまさるので、

わが唇はあなたを讚美する。

五 わが魂が髓と脂で満たされる如く、

六 歎喜の唇でわが口は讚える。

わが床の上であなたを想い起す、

七 夜を護るなべに汝を冥想する時に、

そは汝がわが助けで在り給うたので、

八 汝がみ翼の蔭で私は歎呼する。

わが魂はあなたに追いつがる、

九 汝が右の手は私を確かと支えた。

(詩六三・一、三、五、六、七、八)

原文の第一節は「ダビデの絃歌、ユダの曠野にいた時の。」とあるので、ダビデがサウル王に追跡されてエンゲデの原野にあった頃の背景にふさわしい詩である。

ダビデは神に愛された選びの人であつた。深い情と烈々たる意志と豊かな智慧を兼備した全人的な人物であつた。鹿が溪川の水を慕い喘ぐように神を慕つた。この第一節(原文第二節)はよくその身心渾然たる求めを表はしている。我らはキリストをこのように慕はないではいられないのが本當の信仰否信交なのである。人間の文化文明で心がみたされていると思つてゐる人には、この愛慕は出て来ない。愛慕の源は、キリストの十字架・復活・聖霊の絶對的な愛に圧倒される事態である。キリストの愛のみ翼の蔭であり、神・キリストの力強い聖手を通して生命が流れ入るから疲れを知らぬことになる。

4月26日

「ただあなただけ！」

(詩篇第73篇)

神は恵み深い哉！

イスラエルに、心の清き者に対^{むか}つて。

だが私は、わが脚は跟^{よち}めくばかり、

わが歩みは滑^{すべ}って転ぶも同然。

そは私は驕^{おご}る者を妬^{ねた}んだり、

悪者の平安を見たりするから。

彼らは嘯^{うそ}く、「神がどうして知ろう、

至高^{いとたかしもの}者に悟りがあるか」と。

終^しに私は神の聖所に住^すつて

彼らの終末^{しうまつ}を究めんとした。

彼らはいたく破れよう、瞬^{はなづか}く間に。

彼らは絶え果てよう、畏懼^{おそれ}の為に。

天上^{てんじやう}天下誰をか慕^ほおう。

ただあなただけ！

わが身わが心は衰^{おとろ}えるとも、

神は絶えずわが心の磐石^{いわいし}、わが嗣業^{ゆづり}。

傲慢なる者、貪欲なる者、強暴なる者、そういつた連中がわが代の春とのさばる世の中である。彼らは傲然と声を放つて言う、「神がどうして知ろう」と。一切の幸福は彼らの擅^{たかり}にするところのようである。そのためにわが魂は餓^うまれ、わが雙脚は蹉跎^{さだ}たらしめられる。こうなるとこの現実のうち勝つためには次元のちがった処へ身心を投げ入れるに如かずと思つた。「あなた！」と全存在を以て呼びかけ得る唯一者が在る。「わが磐石、わが嗣業」は「あなた」である。この世がどんなに矛盾と不合理とに満ちても、然り「私」がどうなっても、なほ希望を托し得る者は、「天上天下、あなたを描いて私の慕う者はない！」この私にとつての「あなた」はキリストである。読者よ、「私もそうです」ですか。そんなら嬉しいです。

4月27日

葡萄樹
(詩篇第80篇)

イスラエルの牧者よ、傾聴し給へ、

羊群の如くヨセフを導く者よ、

ケルビムの上に坐する者よ、

光を放ち給へ。

神よ、我らを還し給へ、

み顔を輝かし給へ、

さらば我ら救はれん。

葡萄樹をエジプトから汝は移し、

諸国人を追いのけてこれを植え給うた。

汝は樹の前を整え、その根を根づかせ、

これを国内に蔓延らせ給うた。

山々はその蔭に蔽われ、

神の香柏はその蔓枝にからまれた。

その樹はその枝を海にまで伸べ、

その若枝を河にまで伸ばした。

さらば我らは汝から離れ去らず。

アブラハム、イサク、ヤコブ（イスラエル）、ヨセフという父祖たちの名は即民族の名でもある。遊牧の民イスラエルの神は牧者に比喩されている。ケルビムは契約の櫃の両側から羽を伸ばして櫃を被っている天使で、神の御座の象徴である。「神よ光を放ち給へ」と叫んでいる。

「我らを還し給へ」、この祈りは、神の本願にすぎない祈りである。運命、環境をひるがえして神に還歸せしめ給え、であって、み力に全托するこの祈りは聴かれる。ドイツの詩人ヘルダーが「全世界がある一人の子を退けても、母はその子に全世界となる」といったが、キリストの救はこのような救だ。葡萄樹はイスラエル民族のこと。イザヤ書第五章とヨハネ福音書第十五章を是非参考して下さい。

4月28日

力より力へ
(詩篇第84篇)

いかに愛すべき哉、^な汝が帷帳^{あけばり}は！

万軍のエホバよ！

わが魂は絶えいるばかりに

エホバの大庭を慕い、

わが心わが身は活ける神に叫ぶ。

その力あなたに在り

その心シオンの大路にある者は

さいわいなる哉！

彼らはバーカーの谷を過ぎるときも、

そこに泉を湧きたたせ、

また前の雨は

恵みをもって之を被った。

彼らは力より力へ進み

遂におのおのシオンに達^{いた}つて

神にまみえる。

この詩は巡礼の歌で、神殿はバビロニヤ捕囚からエルサレムに帰還して、五一五年に再建された第二神殿のこと。帷帳とは神殿の中の幕屋のこと。第二節は、わが魂、わが心、わが身が、即ち全存在が活ける神を慕ってやまない、という実に切々たる宗教的情熱で、神殿に臨在する神、否実に神御自身が活ける神殿という現実。シオンはエルサレムの丘、神の都の大路は天国の徴。

「バーカーの谷」とはベカの樹の生えている水のない谷のこと、涙の如く樹脂が滴るので語呂からも「涙の谷」と訓みかえたりする。苦難の人生路に沿って泉を湧き立たせる神の恵みを茲に謳っている。天来の力から力へと人生路を前進して、天のシオンを目指して歩き貫く帰天の旅こそ人生。

4月29日

戦闘の幕屋
(詩篇第91篇)

「至高者^{エル・ヨーン}の隠れ場に坐する者こそ

全能者^{シヤハ・ガイ}の蔭に宿るなれ。」

「わが避所^{サキトコロ}わが城^{シヤロ}わが依頼^{イタカ}むわが神よ。

「その翼をもて汝^{ナメ}を被^{カフ}い給うから

彼の翼の下に汝^{ナメ}は隠れる。

彼の信実^{エメツ}は小盾、大盾。

悪^{アク}しきこと汝^{ナメ}に至らず。

禍害^{ワザワイナ}汝^{ナメ}が幕屋に近づかじ。

「そは御使^{ミツリ}たちに命じて

彼は汝^{ナメ}が道すべてに於て

汝^{ナメ}を護^ホらせるから。」

「彼れ我を愛慕したので我は彼を救はう。

彼れわが名を知るがゆえに

我れは彼を高きに揚げよう。

長寿^{ナグサウ}をもて彼を満ち足らわせ、

わが救済^{スグイ}を彼に証示^{シメ}そう。」

この詩篇九一は詩篇四六の姉妹篇と見て好い。上掲の二節は詩人の言。一、四、一〇、一一は天使の言、一四、一六は神の言。

天使の言は何とたのもしい執成してはないか。宗教の奥義は、神を隠れ場とし、その翼の蔭に宿り、神の中に自分を置くことにある。地上の幕屋に在りながら、幕屋が神の翼となるのである。そこには神の力がかかっているから敵から護られる。敵は勿論サタンの勢力である。神・キリストは絶大なる力をもつて護り給う。

神・キリストを愛慕してやまず。聖名は直ちに力である。み翼に乗せて高きに揚げ給う。使命のある限り長寿を与え、聖名の、福音の証者たらしめ給う。救済は聖名のためであり、伝道のためである！

4月30日

旧約の福音
(詩篇103篇)

わが魂よ、神を讃めまつれ。

わが五臓六腑よ、聖名を讃美せよ。

彼は汝が不義のすべてをゆるし、

汝が病患のすべてを癒し給う。

神は憐みと恵みに溢れ、

怒ることおそく、慈しみ豊かである。

彼は我らの罪なりに我らをあしらわず、

我らの不義なりに我らに報い給わない。

東が西から遠く隔たるように、

彼は我らの罪過を我らから遠ざけた。

父がその子らを憐れむように、

神は彼を畏れる者を憐れみ給う。

神の愛は永遠から永遠に畏神者の上に、

その義は子らの子らに及ぼう。

神を讃美せよ、その万軍よ、

その聖意を行ふ奉仕者よ！

この詩篇第一〇三は、ある意味で詩篇全一五〇篇中の最大なるものとも言い得るほど福音的である。地獄的ななやみの第一〇二に對してこの詩篇は天国的である。それはイザヤ書第三四と第三五章の闇と光の如くロマ書第七と第八章の死の苦しみと生の歡喜の對比の如くである。

神の讃美は心魂と五臓六腑、即ち全身的なものであれ。神は一切の不義を無条件にゆるし、どんな病患も根源的に癒し給う。それは全身を神・キリストの中に投入するときに！驚くべき聖靈のはたらきを体験させられる！

神・キリストの愛は不滅！キリストの義を与えて下さる。そのめぐみを身証して子らにつたえよ。天の万軍が味方だ、聖意を體現せん、贖れた無者として。